

心をつくる労働運動

みはる
一次世代日本を見晴かしー

篠田 徹

(早稲田大学社会科学総合学院教授)

1 ふりだしの1949年総選挙

本稿執筆にあたって編集部から尋ねられた論考の中身は、「二度の政権交代を経験して、労働組合と政権与党、政治との関わり等、改めて労働運動の役割、課題とは何か」に付いてであった。考え甲斐のあるお題ではあるが、やはりこれを論じるのは容易ではない。そこで此の頃筆者が拘っている運動史を振り返り、日本の労働運動にとって似た様な時期はなかったかとあれこれ当たっていると、国立国会図書館調査立法考査局が出す『レファレンス』の2005年4月号に、間柴泰治、柳瀬晶子の両氏の手になる「主要政党の変遷と国会内勢力の推移」という資料に出会した(間柴・柳瀬2005)。これをつらつら眺めるに、どうも1949年1月の第24回総選挙というのが、今回の論考の参照点になりはしないかと思えた。もちろん筆者は日本政治史の専門家ではないし、日本の政治発展における今回の選挙結果の意味に付いては、その適任者によって別稿が用意されると伺っているので、これは飽く迄筆者の頭の体操上想いつた事だと先ずは断っておく。

2 権力と向き合う労働運動

と、この後続く独自の解釈の言い訳をしておいて話を進めると、ちなみに1947年4月に行われた第23回というのは、社会党が143議席ながら辛くも前与党自由党を含む他党をかわして比較第一党になった総選挙であり、ここから片山、芦田内閣と労組が推す社会党が政権与党となる。そして49年1月に実施され

た24回総選挙で、社会党は48議席と惨敗を喫し、民自党が264議席で与党に返り咲く。ちなみに民主党も69議席を獲得し、共産党の35議席という大躍進を除けば、左右の割合とその激変ぶりは今回の選挙結果に相通ずるものがあるといってもよからう。

では敗戦直後に労働運動が再建されてこの時期までの凡そ3年半とは、労働政治的に言っても如何なる時期であったろうか。最早70年も前のことなので、本誌の読者の多くを占めるであろう労働運動関係者にして見ても、占領軍の介入で幻に終わった二・一ゼネスト位は聞いた事があるが、後は世上同様非常に騒々しかった事を覚えておられるのが精々かもしれない。尤も此処ではそれで十分で、この時労働運動は正に騒々しかった。只敢えて言えばそれは、占領期という大きな制約はあったが、この間騒々しく試みられた政労使の協調体制にせよストライキや生産管理等の直接行動にせよ、労働者と労組や政党等々を代表する組織は、政治権力、経済権力に直接肉薄し、それを奪取、或いは其処迄はいかなくともせめてそれを共有し、政府や会社の政策や制度を変える事によって、どん底にあった勤労家庭の生活を少しでも改善する事を目指した時期ではなかったか。そしてこの点、もっと遙かに穏やか且静かな形ではあったにはせよ、この間の民主党政権の成立が現実味を帯びて来た時期から昨年末の選挙迄、労働運動と民主党政権が考え続けて来た事は、流石に生活状態が大いに異なるとはいえ、基本的には同様の事ではなかったか。

3 心と向き合う労働運動

上述の本稿の課題に則せば、問題はその後労働運動が如何したかであろう。結論から言えば、戦後労働運動はここから軸足を其れ迄の政治経済戦線から、「戦後」或いは「冷戦」という時代状況の中で形造られて来る社会文化戦線に移した。そして政府や議会、職場や地域で政策や制度等の物事の仕来たりを決める処に直ぐ様影響を及ぼそうとする以上に、そういう決め事が自分達の生活や生き方にどの様な意味を持つのかを説き、又一緒に考える機会や場を、労働者やその家族と共に、そして彼等彼女等が生きる地域で持った。こうして戦後日本の形が決まって来る1950年代以来、労働運動は次から次へと出て来る新たな政策制度の諸課題を捉えては、老若男女幅広い人々にそういう経験を出来るだけ沢山して貰う事で、物事に対する人々の考え方や感じ方、或いは在るべき生き方、暮らし方、それが引いては社会として国の内外に生起する様々な事件や事象への対処の仕方や国民として持つべき態度に影響を与えようとした。つまりこの時労働運動は、戦後日本人が心の習慣を作るのに大きな役割を果たした。

むろん戦後労働運動で、どの運動が具体的にどんな心の習慣をもたらしたかを確かめるのは無理な話である。寧ろ此処で言いたいのは、それらの運動の積み重ねが直接間接に、この時代にこの国に生きた全ての人々が吸った、「戦後民主主義」の空気を作るのに少なからぬ影響をもたらしたという事だ。そして労働運動は、そういう時代の空気を通して政治権力や経済権力の決め事を陰に日向に方向付けていったという事だ。つまり戦後労働運動はこの時期から、権力に直接向き合うことによって、在るべき社会や国の在り方を実現しようとする事に於いてよりも、人々の心に向き合う事に拠って、人々が自分達で在るべき社会や国の在り方を考え、何よりも自分達の生活や生き方、働き方に於いて、その在るべき姿を追い続けられるような時代環境を作る事に於いて為した事の方が多かった。

4 戦後日本人の心の習慣

では戦後日本人の心の習慣とは、具体的にどんな風にこの国や社会を作り、其処で生活

する人々、取分け働く人々の生き方を形作って行ったのか。例えば戦後日本と言えば、「平和と民主主義」と「経済成長」が二大看板だったことは、それに対する好き嫌いは先ずは置いていて、多くの人が一先ず^{うなず}頷く処だろう。この二つは言うまでもなく切っても切れない関係にある。いや寧ろ^{むし}後者は前者の一つの表現形態、或いは前者の精神を体現した暮らし方の一つと考えても良い。詰り一方で「平和と民主主義」という空気を吸いながら、他方でそういう国に生きる生産者或いは生活者としてその誇りを毎日の生活や長い人生に於いてどうやって表現していったら良いかを、時折でも考えるという心の習慣を育むうちに、戦後日本人はそういう世界で最も大事な事であろう、「より良いものを、より沢山の人が使って、生活を良くする」ことが出来る毎日をこの地球に作り出す事を自らの使命にして、軍需ではなく民需、それも日用品という平和と民主主義のための経済活動で世界貢献する事を目指して来た。そのある種の「経済伝道」は、次第にただ作った物を日本の内外に送り出すだけでなく、その作った物を活かせる生き方、暮らし方を考えながら作るようになり、或いは作った物が又更にそれを一層活かせる生き方、暮らし方を生み出し、又更にその作り方や作る事そのものをも、世界の人々と共有するために工場や会社が其処で働く人々や家族と地球の色んな所に出て行ったりした。

其処にはこういう時代の空気、或いは心の習慣中でも最も根本にあったであろう原則、即ち「人は強くなければ生きていけない、でも優しくなければ生きる資格がない」とでも表現出来る集合規範が人々を捉えていなかったか。戦争を経て、戦後日本人は後者に一層重きを置いた生き方を選んだ。それが謂わばこの人々の生活を豊かにする価値あるものを創って世界を平和で民主的な世界にする、或いは今風に言えば経済に拠る国際貢献の道という事ではなかったか。

5 戦後日本経済の強み

こういう戦後日本人の心の習慣を考えると、戦後日本経済がなぜ強かったかも自ずと分かって来る。恐らく戦後日本経済の強みは、これは自分達が生きていくための金稼ぎでは

なく、みんなを幸せにする「ものづくり」だという処にあったのではないか。詰り戦後日本人は、経済活動に於いていつも其処に作った製品や施設や、或いはサービスを前にして、笑顔^{こぼ}を溢すであろう、多くは未だ見ぬ、或いは一生会う事はないが、でも自分と同じ様に家族や地域の人達と平和に豊かに暮れたいと思う遠くの人々の事を思ってきた。そういう働く人々の想像力がなければ、戦後日本製品の高い品質は絶対になかったであろう。

戦後日本経済の「強さ」は、正にその経済活動にこういう何のために、誰のためにそれを作るのか、もてなすのかという「意味」をいつも見いだそうとして来た事だったと思う。日本の自動車製品や家電製品の強さは実はそういう願いがデザインや機能や価格に反映されていたからではなかったか。勿論こういう考え方は戦後日本人にしかわからないものではない。スティーブ・ジョブズは、ソニーのウォークマンから製品が人々の生活を豊かにする底知れぬ力を感じてアップルを立ち上げた。iフォンやiパッドは遠くに住む子供達や孫達、そして離れ離れになった友達と誰よりも会いたがっていたシニアの人達の生活を一変させた。そういえばビル・ゲイツはコンピューターやインターネットを、自分の親がそれを使えたらどんなに良いだろうと思って始めた事が、マイクロソフトに繋がった。

6 戦後日本人に生きる希望与えた戦後民主主義

そしてこの広い意味で、世界の中で日本が働く意味を与える事に携わって来たのが、国内外に亘る平和や職場の内外に民主主義を広げようとし、平和や民主主義を大事にしたいと思う人が作るものは違ふと信じて来た戦後労働運動であり、それが大事な屋台骨となった戦後民主主義ではなかったか。尤も此処で言っている戦後労働運動や戦後民主主義は、特定の党派や組織、或いは特定の運動や活動を指しているのではなく、それら全てを包みこむ労働運動総体や民主主義総体を考えている。だから此れ迄そういう意味で評価される事が少なかった自民党政権やそれを支えた人々、或いは経営者の中にも沢山の戦後民主主義者がいると思っているし、今まで余りそ

ういう見方をされなかった生産性運動も戦後労働運動の一つの表現だと思っている。

おそらく戦後民主主義、取り分け戦後労働運動の最大の功績は、こういう働く意味を含めて、人々に生きる希望を与えて来た事ではないか。もう戦争はないんだ、また戦争になりそうになったらそれをさせないんだ、或いは戦争をしている人達がいたら、何とか止めさせるんだと思う事、思える事が、どんなに人々の明日を明るくし、其処に生きる喜びを味わおうと人々が毎日を前向きに暮らすようにさせたか。もう考えてはいけない事や知ってはならない事ややってはならない事がないと思える事が、どれほど人々にそれがどんなに困難な事であっても挫けずに頑張るといやる気を引き出させた事か。自分が除け者になる事はおかしな事であり、皆が幸せになればそれは正しい世の中ではなく、そして何よりもそう思っている人が他にも沢山いるんだと信じられる事が、どれほど人々に自分の思いを皆んなに伝える勇気を与え、そうしようとする人に手をさしのべ、一緒に手を繋ぐ喜びを思い知らせたことか。

戦後日本人はこれらの希望の空間をただ頭の中に思い描いていただけではない。毎日の生活の中で、デモやストライキのみならず、組合の集会や労組関連の様々な情報媒体を通じて、そこで語られ議論され主張されている中身や溢れる世界事情の詳細は分からなくても、或いは関心はなくても、少なくともそういう希望を持つ事が守られる時空間がある事をはっきり目の当りにする事が出来た。又そういう所で人々がいつもとは違った顔と声で、より自由で平等な人間関係を作れる事が、仮令短い間でも感じられる事が出来た。こういう仮令それが実現できるかどうか多少自信がなくても、あるべき働き方、暮らし方、生き方を求める事は決して無駄な事ではないどころか、生きる喜びそのものであるという信念と想像力こそが、戦後日本経済の信念と想像力の経済を生んだのであろう。

7 失われた20年

こうして考えてみると、所謂「失われた20年」や最近の企業を始めとした日本全体の地球的後退或いは世界に關与する事柄から引き

籠る理由も分って来る。それは政府や企業の政策以前に、日本人がこの間世界の中で生きる意味、働く意味を見失ってしまったからであり、それは又そういう意味を確かめる事が出来る民主主義なり労働運動の在り様が、非常に見えにくい物になったからではないのか。或いは80年代辺りから戦後労働運動や戦後民主主義の土壌は耕されることが減り、その後は土中の養分で食い繋いでいたのが、最早それも尽きたのかもしれない。それと労働運動自体、前に述べた権力と向き合うことに軸足を移す助走を80年代には始めている。

その結果この国の人々はこの20年、これもまた先にふれた戦後日本人の心の大原則である「人は強くなければ生きていけない、でも優しくなければ生きる資格がない」でいえば、前者に重きを置き始め、結局「自己責任」或いは「勝ち組」「負け組」の言葉に象徴される様に、後者に非常に否定的な習慣を培ってきた。それは人が変わった訳ではなく、今述べたように、後者の働き方、暮し方、生き方への希望を持ち続ける努力がなされてこなかったからである。学生と話していて驚くのは、しばしば「優しくなければ生きる資格がない」という部分が、意味はもちろん日本語としても理解不能という反応を示す時である。ただ人を幸せにする良い仕事がしたいと思う気持ちは、多くの日本人と同様彼等彼女等も持っている。問題はそれが出来るという希望をこの社会で持てない事にある。

8 戦後日本人の次世代形成

もちろん権力と向き合う労働運動は必要である。人々の生活に於ける企業や地域や家族の力が衰えるに従い、又市場や非営利セクターがそれらに取って代わる事がなければ、政治に拠って人々の生活が左右される事が前以上にはっきりして来るこれからは、もっと必要だろう。けれども心と向き合う労働運動もこれから非常に大事になって来ると思う。それは戦後日本人の心の習慣が枯渇したからだけではない。ましてや一度や二度の選挙結果で言っている訳ではない。急速に変わりゆく世界の様子を見ていてそう思うのである。ここで日本とそこに住む人々が、世界の中で生きる意味を見出せなかったら、恐らく日本経

済の再生はないし、日本社会の持続可能性自体も危ういと思うからである。

ただそれは戦後日本人との別離ではなく、再会する事で可能となるだろう。言い替えれば戦後日本人の次世代形成に労働運動がどう関るかという問題である。最早紙幅も尽きたので、此处ではその繋がりに付いて一例だけ触れておく。今の地球社会のキーワードと問われればそれは英語でいう diversity ではないか。これは経営の世界では最早大前提となっている様だ。この今やカタカナにもなっている言葉の意味は、多様な人々が自分の個性を生かしながら共に働くという事だ。これは先の戦後日本人の心の大原則に通ずる所があるところか、先取りしていたと言ってよかろう。もっと言えば、色々な人々をあの手この手で束ねながら目標に向かって共に働けるようにするのは、労働運動その物、或いはその日常だとも言える。こういう心の習慣を培うことに於いて、戦後労働運動引いては戦後民主主義は類稀な想像力と創造力を発揮した。世界の中で生きていくダイバーシティな日本とその心の習慣を身に付けた日本人、そしてダイバーシティな世界に生きる人々の生活を豊かにする物とサービスを提供するそれこそダイバーシティな日系企業、更にこうした地球で様々な困難と向き合う多様な境遇にある人々に寄り添い、その解決に力を貸そうと世界中に散らばる日本人とそれを支える日本社会、こういう戦後日本人の次世代形成にとって、戦後労働運動並びに戦後民主主義の運動史は宝の山である。

文献

間柴泰治・柳瀬晶子 2005「主要政党の変遷と国会内勢力の推移」『レファレンス』2005年4月号pp.70-81
国立国会図書館調査立法考査局
(2013年2月18日取得、http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/refer/200504_651/065104.pdf)